

# センタージャーナル

〒460-0016  
名古屋市中区橋二丁目8番55号  
TEL (052) 323-3686  
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳  
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



ご本尊を中心に、囲炉裏の生活が営まれている白川郷（写真中央は明善寺）  
（写真の無断転用はご遠慮ください。）

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを

真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

## もくじ

- ・ 聖典研修 第21・22回  
『仏説阿弥陀経』 —その教義と真宗の儀式— ②・③
- ・ 研究生報告  
災害ネットワーク研修 ④・⑤  
福島は今見て聞いて感じたこと
- ・ 大谷派の近現代史  
満蒙開拓とは何であったのか ⑥・⑦  
—満蒙開拓の史実から学ぶもの—
- ・ INFORMATION ⑧
- ◆イラストカット集（※寺報などにご利用ください）

## 座を尽くす

「都会の人は、都会にないものを求めてここに来られます。私たちにしてみれば、常にあるものです。他所の人が来ることによってその価値に気づかされます」五月末、門信徒と共に白川郷を訪れたとき地域ガイドさんから伺った言葉である。

山に囲まれ、冬は雪に閉ざされ寒さに打ち震える白川郷の人々は、海に面し温和な気候とエアコンのあるマンション生活に憧れるという。しかし都会に暮らす者は、自然とうまく折合いをつけ、囲炉裏の灯火を生活の中心にしてきた人々の知恵と風情に憧れる。地の人にとってありふれたもの。それは数々の試練を経て、たどり着いた一つの達成であると感じてくれるのは、じつは他所の人だと仰る。

何百年と囲炉裏の煙に燻された合掌造りの柱や壁は、漆黒の装いを醸し出し重厚である。何百年の間、一度も絶やしたことがない囲炉裏の火は、単に煮炊きする火ではない。一日の終り、一家団欒を過ごす心の灯火であり、過酷な生活の中に自分を見失うことなく生き続けていきたいと願う人生の燈炬なのだろう。そのことを晩年の宗祖は、

いま庶わくは道俗等、大悲の願船は清浄信心をして順風とす、無明の闇夜には功德の宝珠をして大炬とす。

（『浄土文類聚鈔』 聖典四〇九頁）

と、あらわされる。

思い通りにならない人生に四苦八苦し、涙する我身。その身をつつんで如来は大悲したまひ、如来大悲の願船は一人も漏らさず乗じて順風とする。悲しみを解消するのではなく、悲しみを抱く人間そのものを救うのである。

ところで、囲炉裏には坐る「座」が決められてあるという。母の坐る「嬬座」、家長の坐る「横座」、その向かいの席が「客座」。そして子たちの座は、大人の「膝の上」だそうである。子たちは、前は囲炉裏の暖かさ、背中は親の温もりを感じながら座る。

出仕における着座作法でも、坐るべき畳に對し深々と頭を下げ「座礼」する。与えられた座を敬い、座を尽くす行為である。

私の坐するところも、家庭・職場・地域の中で他者が温めていてくれたものである。その座に對して、私は座を尽くしていただろうか。与えられた座に愚痴を言い、ちつとも頭の下がらん懈怠の私であったと気づかせ、無明の闇夜に大炬を掲げ庶つてくださったのも、じつは法を求め来たった道俗等なのである。「さあ、頭が下がるまで南無阿弥陀仏と申せ」と、在るものの大事を教えて下さっていたのである。

（主幹 荒山 淳）

## 聖典研修

## 『仏説阿弥陀經』—その教義と真宗の儀式—

第二十一回 二〇一七年一月十九日(木)

## 阿弥陀の名義

講師 廣瀬 惺氏 (大垣教区妙輪寺住職)



## 信心回復の目標

依報莊嚴が終わり、正報莊嚴に入つてまいります。ここで説かれる内容は、阿弥陀仏、声聞、菩薩です。私たちから見て、主体を具えていると思われる莊嚴が中心となります。特に、正報莊嚴で説かれる阿弥陀仏について確認しておきたいと思ひます。『聖典』をご覧ください。

舍利弗、汝が意において云何。かの仏を何のゆえぞ阿弥陀と号する。

〔聖典〕 一一八頁

これまで、ずっと「舍利弗」と名前を呼び続けてこられたお釈迦様が、突然「汝が意において云何」と注意を促されることから始まります。「このことが分かっているのか」と呼びかけられ、舍利弗はドキッとされたことでしょう。信仰の悩みを抱えている舍利弗にとって、大変重要な事柄であるからこそ注意を促されたのです。

そしてその内容が阿弥陀の名義(名のいわれ)、つまり「阿弥陀仏とは如何なる仏なのか」ということを明らかにされる

のです。私たちが仏法を学んではまいりません。私たちの心は常に揺れ動いて変わっていきます。そのような自分の思いに惑い流されて信仰の道を見失う私たちに對し、道理として、阿弥陀仏を明確にしてくださいとされているのです。

曾我先生は、私たちが道を求めて歩む上で常に立ち返ることのできる「目標」の大切さをおっしゃってられます。『阿弥陀經』が信心を回復して下さる經典だということを思ひます時、ここで道理として説かれる阿弥陀の名義が、まさにその「目標」を教えてくださいと云えます。

## 名号る仏

それでは阿弥陀の名義についてですが、舍利弗、かの仏の光明、無量にして、十方の国を照らすに、障碍するところなし。このゆえに号して阿弥陀とす。また舍利弗、かの仏の寿命およびその人民も、無量无边阿僧祇劫なり、かるがゆえに阿弥陀と名づく。

〔聖典〕 一一八頁

このように「阿弥陀」という言葉で「無量光」と「無量寿」の仏であることを表していることが分かります。ここで光明無量は「号して」、寿命無量は「名づく」と文字が使い分けられていることが注意されます。親鸞聖人は、「名」と「号」について次のようにおっしゃっています。

名の字は、因位のときのなを名といふ。号の字は、果位のときのなを号といふ。

〔聖典〕 五一〇頁

これは『阿弥陀經』に基づいているのでしよう。親鸞聖人は「光明無量」を果位の時の御名だと教えてくださっています。「寿命無量」は因位の時の御名、ですからそれは法蔵菩薩、つまり本願を表しているといいただかれます。そして「名づく」と「号して」ですから、文字通り名号です。阿弥陀如来は私たちの上に名号る仏だということでしょう。

そして名号る仏は因位の本願であることが大事です。では光明とは何かと申し上げれば、本願に出あった人の上に本願が取る相です。本願は、本願に目覚めた人の上に光明という相を取るといふことです。

## 本願に救われる

ここで明確にしておきたいのは、どこまでも本願に救われるということ。そのことを徹底してきた歴史が七高僧の伝統だと言えます。宗教一般の問題としては、超越と内在という問題になりましよう。両方に依るといふことはできません。

どちらを立場とするのか、決めなければならぬ。本願と光明の両方を依り所として救われていくことは実際問題としては成り立ちません。依り所は一つです。二つですと、股裂き状態です。

ではなぜ光明に依るといふことでは救われないのか。それは光明はどうしても対象化されてしまうからです。何も問題が無い時は、光明に有難さを感じることもありません。しかし光明をいただいている自分自身が立ち行かなくなつた時、危機に陥つた時、その光明は真の救いにならないのではないのでしょうか。

私たちと共にあって自分を支えてくださり、危機を内から開いてくださるもの、それが本願でありましよう。共にあって危機的状況に陥っている私を内から開き、そして未来を展開していただくはたらし。そこに、特に教えが学ばれてきたことの意味があるのでしよう。光明をいただくことによつてのみ救いがもたらされるならば、自然環境に恵まれた日本などでは、それほど教えはいらないと言つてもよいのではないのでしょうか。

私は、このことが聞法の中心テーマだといひたいです。私たちはどうして光明によつて信仰を立てていこうとする傾向が抜き難くあります。それを転じて本願に依つて立つという、そのことがどこまで徹底できるかが聞法の課題ではないかと受け止めています。そのことを確立するために、『阿弥陀經』も説かれていると申し上げてよろしいのでしよう。

第二十二回 二〇一七年二月十七日(金)

『阿弥陀経』の翻訳者を知っていますか？

講師 竹橋 太氏 (儀式指導研究所研究員)



天才僧侶 鳩摩羅什

今日は『阿弥陀経』を翻訳した鳩摩羅什(以下、羅什)についてお話ししたいと思います。羅什は三五〇年〜四〇九年、つまり空思想を説いた龍樹菩薩より後、唯識思想を説いた天親菩薩より前(あるいは同時代)という、両者の間の時代に生涯を送りました。出生は中央アジアの砂漠のオアシス国、亀茲国です。

インドの僧侶であるクマラーヤナが修行の旅の中、亀茲国に立ち寄りました。そこで国王の妹であるジーヴァーと結婚することになったのです。僧侶ですから当然、結婚は許されません。伝記を見ると、妹の強い願いから国王が無理やり頼みこんで、二人は結ばれたようです。そして、羅什が生まれました。

を決めたのです。

羅什は十二歳までアビダルマの教理などを母と共に学び、帰途に就いたと言われます。そしてその途中で立ち寄ったカシユガルにて『般若経』の空思想など大乘仏教を学び、十三歳頃に亀茲国に戻ったようです。そして二十歳になり、一人前の僧侶(比丘)となりました。

破戒

「羅什の才能はすごい」という評判は、またたく間に近隣諸国にも伝わりました。当時の中国は五胡十六国時代とも呼ばれ、多くの国が互いに争っていました。そして同時に、立派な国だと評価されるためにも、諸国の王達は文化人である僧侶を自国に招くのです。その中で注目されたのが羅什でした。

前秦の王である苻堅は、呂光という將軍に命じ、亀茲国を滅ぼして羅什を連れてくるよう七万の兵を与えました。亀茲国は滅ぼされ、羅什は連れていかれます。呂光は羅什が若かったこともあり、偉大な僧侶とは考えず、女性と結婚するよう迫るなど、手荒く扱ったと伝記には書かれています。羅什は拒否し続けたのですが、最後には無理やりお酒を飲まされた

後、女性と一緒に閉じ込められ、破戒したと言われます。最終的には呂光も姚秦の王に攻め滅ぼされ、羅什は姚秦の首都長安に招かれ、訳経作業に入っていました。

さて、羅什が破戒したのは三十五歳の時だと言われますが、伝記にはそれに関して興味深い記録があります。まだ幼い羅什が母とカシユガルに行った時、ある僧侶から「三十五歳まで破戒をしなれば、偉大な僧侶になるだろう。破戒したならば、少しばかり才知のあるといわれる僧侶にしかねないだろう」と予言を受けました。しかし、破戒をしたからこそ偉大な翻訳三蔵になったと思うのです。あるいは、破戒をした「立派ではない」僧侶になったともいえるでしょうか。

煩惱が道場である

研究者たちは、このことは羅什が三十五歳で破戒したことを示しているとして、羅什の生まれ年を決めています。この出来事の意味はいくつかの解釈が可能であると思います。

羅什は諸宗の根本的な依所となる経論を数多く翻訳しました。今日、注目しているのは羅什が翻訳した『維摩経』の次の一文です。

諸の煩惱、是れ道場なり、如實を知るが故に。

〔大正蔵〕十四卷・五四二頁・C段  
つまり「全ての煩惱が道場である、真実を知らせるからである」という意味で

す。一方で、同じく訳経僧として有名な玄奘三蔵は、同じ部分を「煩惱をおさめることがすぐれたさとりだ」と訳しています。他の訳やチベット訳などを見ても同様であり、煩惱を静めるといことが、さとりであるという内容となっています。

文献学的な問題として、羅什の持っていた原典に「煩惱を静めることが道場である」という一言が抜けていた可能性もあります。しかし、羅什はあえてこのように訳したのだと言われています。もちろん煩惱を静めることが、さとりであるということは間違いないと思います。羅什の訳においては、より深い仏教理解が表現されていると思うのです。そして、羅什の生涯を辿ると、なおのことそのように思えるのです。

自分が煩惱の身であることを嫌というほど知らされたのが羅什です。その生涯において、自身が煩惱で出来上がっているという、私たちの真実の姿を、仏から知らされたのでしょうか。真実とは、分かる(対象となる)ものではありません。自身が煩惱成就の身だと知らせるはたらきを真実と言うのです。

## 研究生報告

## 災害ネットワーク研修

## 福島の今 見て 聞いて 感じたこと

前号でお伝えした災害ネットワーク研修（二〇一七年一月三十日～三十一日／教化委員会都市教化部門主催）に参加して聞いてきた「福島の声」。

今号では、研究生が、見聞きして感じたことを、報告します。

## 私の方が元気をもらった

高速道路も伸び、海産物の加工施設もでき、少しずつ復興は進んでいると感じる。その一方で、妻子を避難させた方、進学を機に娘だけを避難させた方、家族で福島に残る決断をした方々のお話を聞かせていただいた。震災から六年が経った今でも、放射能の影響は残る。

今回の研修でも新しい出会いや久しぶりの再会がたくさんあった。いつも名古屋の保養（福島と名古屋をむすぶ子ども会in東別院）に参加してくださっている子どもたちが遊びに来てくれて、とてもうれしかった。同朋幼稚園のお母さんや子どもたち、仮設住宅のじいちゃん、ばあちゃん。毎回優しくしていただき、私の方が元気づけられている。この方たちのことを忘れず、また現地に足を運びたい。

鍋野了悟（第11期生）



除染作業によって集められ、いたる所に山積みされている放射性廃棄物（飯舘村）



真行寺（二本松市）

## 「また会いたい」という思い

今回初めて福島県に赴き、「また会いたい」という気持ちが生じた。メディアで聞いていた事と違う現状をもっと自分の目で確認したいということもあるが、一番の理由は、この機会ですなごつた人たちとまた会いたいと思ったからだ。

当時のことは思い出すのも辛いはずだ。しかし自分のような若輩に真剣にお話ししてくれた。それを聞き、「私に何かできる事はないのか」と考えてみたが、しっかりとくる答えは思いつかない。そんな自分に笑って話してくれる人たちの優しさやパワーに「何かしないと」と焦っていた私が、逆に元気をもらっていた。

だが、この気持ちをこのまま放置すれば、時間の経過とともに忘れてしまうかもしれない。そうはならないように願う自分がある。

加藤博証（第12期生）

## 震災を利用している自分がいるのでは？

福島の現地に行き、心が動かされた自分がいた。しかし、その声を聞く私自身は、どこに立っていたのだろうか。心のどこかで、被災者と被災者ではない私とを分け、「自分に何かできるのではないかと、何かしなければならぬ」と思ってしまった。そして、そう思いながらも、結局、頭で色々と考えて言い訳をしながら立ち止まってしまう。

真行寺の佐々木道範さんが「いのちがひかっている」という言葉をおっしゃった。その言葉から、現地の人たちは、苦しみ悩みの中でも確かに生きていると強く感じた。帰ってきてからは、ほとんど震災のことを忘れて生活をしている自分がある。他方、今も苦しみ悩みの中で生活をしている多くの人がいる。私は、何を求めて生きているのだろうか。私の都合で、震災を問いと利用しているのではないだろうか。

小塚 順（第12期生）



浪江駅前商店街  
原発事故の影響で、まだ手付かずの被災家屋が多数残っていた

（双葉郡浪江町）



正福寺（双葉町で被災し、現在、福島県須賀川市に仮本堂を建立）  
このたびの研修では坊守の松本洋子さんに、今の心境を語っていただいた

## 不安を口にできない空気

山積みになされた除染後の黒い袋や、人の見当たらない商店街のほかは、どこにでもある景色なのに、そこに今までと同じように住むことはもうできない。何も変わらないのに、すべてが変わってしまった。

正福寺の松本<sup>まつもと</sup>さんは「これからも福島で」という言葉を何度も話された。その言葉の力強さや決意から、一人ひとり不安や葛藤を抱え、時には大切な何かを切り捨てる選択をしなければ生きていけない厳しい現実を知らされた。

今の福島県には不安（放射能）を口にできない空気があり、大多数の人は、「もう大丈夫」だと言わないとやっていけないと聞いた。大多数の「大丈夫」という空気の中で、不安に思う気持ちを押し殺している人がたくさんいるのではないかと。今この瞬間も、一人ひとりに震災が重くのしかかり続けていると感じた。

寺西 修司（第12期生）



海水浴場の再開をめざして復興整備が急がれていた（相馬市：原釜尾浜海水浴場）

## 「寄り添いたい」と思うが…

地震、津波、放射能によって人々が苦しむ惨状を知るとは、とても恐ろしいものだった。六年経った今もなお、故郷に戻れず、終わらない生活を続けることのしんどさを感じられた。

国は福島の現状に向き合うことを徐々に放棄し始めているのではないかと。佐々木道範さんの「自分たちの存在ってなんだろう」という言葉が忘れられない。

子どもたちは自由に外で遊ぶこともできず、家族バラバラで辛い暮らしをしている上に、いじめを受けることもあると聞いた。「福島出身」という言葉を声に出

すことすら難しい現状に胸が痛んだ。

「なんとか福島の今の現状に寄り添いたい」と思う一方で、「そんなことできるわけない」と思ってしまう私がいる。そういう自分がいるということも、今回の研修で知らされた。

水野 拓磨（第12期生）



犠牲者の名前が刻まれた慰霊碑の前で手を合わせる研究生  
（相馬市：伝承鎮魂記念館）

## 聞思して遅慮することなかれ

震災後六年を過ぎた東北では、次第に支援者は減少し、国の補助も打ち切られ、のしかかる各々の生活苦に孤立が深まり、「もう放射能（現実）を考えたくない」というところまで追い詰められている。本当は家族や子どもの健康が心配でないはずなのに。

「愚禿釈」と名のられた宗祖の眼差しは、必死に現実に向き合おうとする人々のみならず、「人間だからね」と一括りの一般論で自らを納得させようとする人々さえ包み込んでいる。否、むしろ「もう大丈夫」「考えても仕方ない」と、「本当のこと」に目を背けて開き直らずには立ってられない人々に、より強い共感を抱いたように思う。

「愚禿」の身でありながらも、仏弟子でありたいと願う宗祖の声が、東北の人々の姿と重なって私に響く。「あなたが今思うことは本当ですか。聞き続けよ。他者の苦悩の声を。問い続けよ。他の誰でもない、あなたの本当の願いを。」

（研究員 大河内真慈）

## 研修スケジュール

### ○第一日目（1月30日）

- ・福島県郡山駅集合
- ・正福寺仮本堂訪問（須賀川市）（松本坊守よりお話）
- ・真行寺訪問（二本松市）（二本松市在住の3人の方からのお話）

### ○第二日目（1月31日）

- ・飯館村～南相馬小高地区までバス移動（車中で木ノ下氏からお話）
- ・請戸海岸～浪江市街を視察
- ・相馬市松川浦で漁具倉庫、原釜、尾浜海岸、慰霊碑、鎮魂祈念館、磯部水産加工場を視察  
（語り部と漁協の太田課長からお話）
- ・仙台駅にて解散

谷派の  
大近現代史

講義抄録

# 満蒙開拓とは何であったのか

## ―満蒙開拓の史実から学ぶもの―

寺沢 秀文氏 (満蒙開拓平和記念館副館長・専務理事)



教化センターは、第28回平和展「仏教の社会活動―『満洲侵略』と大谷派―」の開催に合わせて、平和展学習会特別講義を行った。満蒙開拓平和記念館副館長（専務理事）の寺沢秀文氏を講師に迎え、「満蒙開拓とは何であったのか―満蒙開拓の史実から学ぶもの―」をテーマに、約80人の聴講者とともに現在の中国・東北部近辺に位置した「満蒙」を「開拓」した日本人の実情について学んだ。

ここに当日の講義を抄録する。

### 「満蒙開拓」に向き合う視点

私の両親は満蒙開拓団の開拓団員でありました。一番上の兄は現地で、僅か一歳で命を落としております。かつて『大地の子』というドラマがありました。かつて『大地の今も生きていればあんなふうだったのかな』と、他人事ではないかという思いから、長野の満蒙開拓平和記念館でボランティアとして活動しております。

私自身は戦後の国内生まれであり、現地の開拓地で暮らした経験はありませんが、両親をはじめ、たくさんの方々の開拓団員の方々からお聞きしてきたことを元に、お話をさせていただきますと思います。

### 「満洲」という国

中国の黒龍江省、吉林省などをまたぐ広範囲な地域に、かつて「満洲」という国が作られておりました。一九三二（昭和七）年に建国され、一九四五（昭和二十）年ま

事情もありますが、当時の長野県内のリーダーに推進論者が多かったということもあり、私どもの記念館がある下伊那地域が、全国でも多くの開拓団員を送り出した場所と言われております。

開拓団は大きく二つに分かれます。いわゆる「一般開拓団」と、十四歳から十七歳の「青少年義勇軍」です。国の方から「ある程度の数を出せ」という割り当てが来て、学校の先生方もそのノルマを果たすために一生懸命だったそうです。「満洲」に行けば非常に広い農地がもらえるという謳い文句の中で、いわゆる余剰人口の人減らしという背景もありました。

「満洲国」は、日本人・漢民族・朝鮮族などが仲良く相和して理想の国を作る「五族協和」というモットーを掲げていました。現地では、民族差別も実際にはありませんでした。日本人が一等民族、現地の朝鮮人が二等民族、現地の「満人」と呼ばれていた中国人たちが三等民族と分けられて、労働賃金にも違いがありました。

### 多くの開拓民を出した長野県

開拓団は、全ての都道府県から渡っております。その総数が約三十二万人<sup>※2</sup>という史料もあります。そのうち一番多いのが長野県で三七、八五九人です。二番目の山形県の一七、一七七人の二倍以上の多さです。山岳地帯で農地が少ない地形という

「満洲」という地域に日本が権益を持ったのは、日露戦争で日本が辛うじて勝ったからです。ロシアが「満洲」に持っていた権益、特に、後に「満鉄（南満洲鉄道）」と呼ばれる鉄道を手にしました。そこに民間人の開拓団を配置することによって、国防の一端を開拓団に担わせようとしたのが「満蒙開拓」のもうひとつの側面でした。ソ連（ソビエト連邦）と「満洲」との国境に近い方に多くの開拓団が入っており、いわば人間の防波堤、人間の盾として送り込まれていったという性格を持っていたのです。

【全国都道府県別 開拓団員 送出数一覧表】

順位 (位)	都道府県	合計 (人)	一般開拓団			青少年義勇隊		
			(人)	(%)	(位)	(人)	(%)	(位)
1	長野	37,859	31,264	82.6	1	6,595	17.4	1
2	山形	17,177	13,252	77.1	2	3,925	22.9	3
3	熊本	12,680	9,979	78.7	4	2,701	21.3	11
4	福島	12,673	9,576	75.6	5	3,097	24.4	5
5	新潟	12,651	9,361	74.0	7	3,290	26.0	4
6	宮城	12,419	10,180	82.0	3	2,239	18.0	17
7	岐阜	12,090	9,494	78.5	6	2,596	21.5	12
8	広島	11,172	6,345	56.8	13	4,827	43.2	2
9	東京	11,111	9,116	82.0	9	1,995	18.0	23
10	高知	10,482	9,151	87.3	8	1,331	12.7	41
∴	∴	∴	∴	∴	∴	∴	∴	∴
43	愛知	2,358	634	26.9	46	1,724	73.1	32
44	長崎	2,150	747	34.7	44	1,403	65.3	39
45	千葉	2,148	1,037	48.3	42	1,111	51.7	45
46	神奈川	1,588	1,013	63.8	43	575	36.2	47
47	滋賀	1,447	93	6.4	47	1,354	93.6	40
	計	321,882	220,255	68.4		101,627	31.6	

当表は『満蒙開拓史』（満蒙開拓史刊行会）に記載のものを整理した『長野県満蒙開拓史（総論編）』（長野県満蒙開拓自興会刊）に記載（309頁）のものを再整理して作成した。開拓団員数については当時の混乱、統計の取り方等により数値に開差があり、当表についても一応の目安として頂きたい。なお、後に全国開拓自興会（解散）では暫定的な満蒙開拓団員総数について約27万人としている。

### 敗戦直前まで続いた移民

『望郷の鐘』という、満蒙開拓団を取り上げた映画があります。主人公は「残留孤児の父」と呼ばれた山本慈昭さんです。記念館の近くにある、長岳寺というお寺の住職を務めた方です。阿智村などから出た「阿智郷開拓団」の、現地の学校の先生として渡り、戦後、残留孤児を日本へ帰すための活動をされたことを映画化したのです。「阿智郷開拓団」はソ連との国境近くに送り込まれています。開拓地に入った時期は、一九四五（昭和二十）年五月のことです。



満蒙開拓青少年義勇軍の少年たち。あどけない笑顔を浮かべ彼らには、後に大きな悲劇が待っていた。

した。終戦の僅か三ヶ月前です。そんな時期に、「ソ満国境」という危険な所に民間人ばかりの開拓団が送り込まれたのです。実は、この「阿智郷開拓団」が最後の開拓団ではなく、もつと遅くに東京から行った開拓団もありました。彼らが「満洲」に渡るために敦賀港を出たのは、終戦の僅か二週間前の八月二日です。彼らは自分たちの開拓地に到着することなく、そのまま逃避行へと追いつまされてしまいました。

### 宗教団体と移民

開拓団には様々な形がありました。キリスト教が派遣した開拓団や、天理教の青年部が中心となった開拓団、本門佛立という日連系の宗派が中心となった開拓団もありました。そして真宗大谷派も、「満洲」には深く関わっておりまして。

実は、真宗大谷派、あるいは仏教界は、かなり早い時期から「満洲」に関わりを持っていました。私の知る限りでは、特に日露戦争が

終わつた後、多くの戦死者の慰霊も込めて仏教界から現地に渡つたということも聞いておられます。今回の「平和展」でもその事が取り上げられていますが、例えば、哈爾濱駅の北側に、東本願寺がありました。私の母親が、生まれたばかりの兄を抱えて開拓団の皆様と逃避行して、逃げ場というか、駆け込み寺として匿っていたのがこの東本願寺です。その附属の桃山小学校という一九〇九(明治四十二年)に建てられた日本人学校もありました。この建物は、兆麟小学校と名を変えて、今も現役で頑張っております。

### 開拓団の悲劇

「満蒙開拓」には、悲劇が待っていました。一九四五(昭和二十)年八月九日、ソ連が「ソ満国境」を越えて「満洲」へと攻め込んできました。当時、日本とソ連は不可侵条約を結んでいましたが、一説には、日本が負けることが確定した段階で、ソ連が予定を早めて攻め込んできたとも言われています。

ソ連が国境を越えて攻め込んできた時、開拓団の中に年頃の男性の姿はありませんでした。日本の戦局が不利になると、主力部隊はフィリピン戦や沖繩戦などの南方戦線、あるいは本土の防衛のために出ていってしまいました。その穴埋めのために、十八歳から四十五歳までの、まともな軍事訓練も受けたことがない開拓団員の男性たちが、全て徴兵されていったのです。この「根こそぎ動員」によって、開拓団からは若い男性が姿を消していました。私の父親も、終戦の僅か二週間前の七月三十一日に招集されました。二日後には軍隊に入った

ものの、武器や兵器は全く無かつたそうです。程なくしてソ連軍が攻め込んできて、開拓団の男性も含めて全てソ連軍の捕虜となり、平均して三年間ほどシベリアへ抑留されました。

同時に、襲い掛かってきたのはソ連軍だけでなく、現地の中国人たちの姿もありました。よく体験談の中で、「匪賊」が襲ってきた、という言い方をされますが、盗賊的な「匪賊」ばかりがいるはずもなく、日頃から日本人のことを恨んでいた、現地の中国農民なのです。

「開拓」ですから、私の父も原野を切り拓いて開墾するのかと思つて現地へ行つてみたら、そこにはもう家も畑もありました。それらは現地の中国農民の家や畑であり、それを非常に安い値段で買い上げるなどの形で入つて行つた形態の開拓団が、かなりの割合を占めています。もちろん、後から入つた開拓団の一部には実際に原野を開墾した例もあります。

開拓団を守るべき軍隊がいなくなつてしまい、若い男性もいない、女性や子どもや老人ばかりの開拓団の悲惨な逃避行が始まります。その中で多くの集団自決も起きました。敵の手にかかる前に自分たちの手で……ということ、青酸カリなどの毒薬や、あるいは円陣を組ませて手榴弾を爆発させるなどの方法で、多くの犠牲者を出しました。もちろん逃避行に成功した開拓団もありましたが、多くの犠牲者を出して、旧「満洲」の歴史はこうして閉じていきます。

### 現地に留まれと言う日本政府

生き残つた開拓団の人々は、すぐに日本

へ帰つてくることはできませんでした。当時の日本政府の方針は、「外地」つまり国外にいる日本人は現地に留まつて生き延びろ、というものでした。

そのことを示すふたつの文章があります。ひとつは終戦の前日、八月十四日のものです。ポツダム宣言を受諾して敗戦することが決定したその日に、外務省が「外地」にいる日本人に対して「居留民は出来得る限り定着の方針を執る」としたので。もうひとつは八月二十六日の大本営のもので、ここには「満洲に土着する者は日本国籍を離るるも支障なきものとす」とあります。つまり、日本国籍を捨ててもいいから現地に留まつて生き延びろ、ということを行っているわけです。

多くが開拓団員の子である「中国残留孤児」たちは、「国から三度捨てられた」「農業移民として『満洲』へ渡つたのに、結果として国によって棄民となつた」ということを訴えています。もちろん日本も焼け野原で大変だったと思います。が、「満洲」が本当に理想の国であったとするならば、どうしてこのような悲しい子どもたちが生まれてしまったのかということ、私たちは考えなければならぬと思います。

一般社団法人 満蒙開拓平和記念館  
(長野県下伊那郡阿智村駒場711番地10)  
Tel・Fax 0265-43-5580  
http://www.manmoukinenkan.com

\*1 終戦時に開拓団に在籍した実数

\*2 訓練中の未渡満者、終戦前帰国者等を含む

## 聖典研修

## 『『仏説阿彌陀經』—その教義と真宗の儀式—』を終えて

5月18日をもって、3年間に渡り廣瀬惺先生と竹橋太先生をお招きして学んだ『仏説阿彌陀經』の講義が終了した。内容は、これまでのジャーナル掲載紙面(91号以降の2・3面)に譲り、今回は最終講義後の謝恩会において、両先生からいただいた「私たちへの宿題」をご紹介します。

廣瀬惺先生は「どこまでも教えに尋ね続けてください。そして読書ノートをつけ、自身が感銘を受けた言葉を留めておいてください。その言葉があなたの歩みを後押ししてくれま

す」と、これまでの自身の歩みをふまえ、お話しくださった。

そして竹橋太先生は「仏教とは、本当の意味での自由を私たちに教えてくださるものではないでしょうか。いろいろなものに縛られ、身動きできずに苦しんでいる現代だからこそ、その教えを必要としている方が大勢いるはずですよ」と、僧侶として生きること戸惑い続ける私たちの背中を押してくださいました。

両先生から提示された宿題を、改めていただいていたと思います。

(業務嘱託 飯田 真宏)



## INFORMATION

## 教化センター日報 ■2017年3月～5月

3月1日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援  
3日 研究生・実習「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ⑦)」  
6日 研究生・実習「真宗本廟一日参拝」  
17日 研究業務「第28回平和展 仏教の社会活動-『満洲侵略』と大谷派-」(~23日)  
18日 研究業務「第28回平和展」特別学習会  
31日 研究業務「第28回平和展」反省会

4月10日 研究生・学習会「真宗門徒講座」事前学習  
14日 研修業務「聖典研修②」(竹橋太氏)  
20日 研究生・学習会「都市教化・災害ネットワーク研修」事後学習  
27日 研究生・実習「真宗門徒講座(はじめての『歎異抄』①)」  
5月12日 研究生・学習会「真宗門徒講座」事前学習  
16日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」学習会  
18日 研修業務「聖典研修②」(廣瀬惺氏)  
26日 研究生・実習「真宗門徒講座(はじめての『歎異抄』②)」

## 2017年度 聖典研修 親鸞聖人の御生涯に聞く

2017年度からは、東館紹見氏(大谷大学教授)をお招きし、親鸞聖人のご生涯と、聖人が生かれた時代について学びます。親鸞聖人は、どのような人々と生き、どのような人々に教えをお説きになられたのか。名古屋教区・名古屋別院宗祖親鸞聖人750回御遠忌を終えた今、改めて宗祖の歩みに訪ねていきたいと思えます。

期 日 第1回 9月25日(月)「親鸞聖人のご生涯に聞く」とは  
第2回 11月6日(月)親鸞聖人が生きた時代  
2018年  
第3回 1月22日(月)誕生と出家  
第4回 3月5日(月)比叡山修学  
第5回 4月23日(月)六角堂参籠  
第6回 5月21日(月)吉水入室

時 間 午後6時～午後8時

聴 講 料 1回500円/全6回券2,500円

(教師陞補のための聴講証発行対象研修)

テキスト 『真宗聖典』



講師：東館紹見氏

## 《雑感》

この4月、3歳の息子が幼稚園に入園した。ところが、5月になり、「行きたくない」と大泣き。嫁は「元気なら行くべき」と言い、ほくは「行きたくないなら行かせなくていい」と大喧嘩。喧嘩は、嫁の勝利。息子は、1週間、幼稚園を休んだ。そのあとは、嫁が無理やり幼稚園バスに乗せたり、車で幼稚園へ送迎したりした。今朝も、息子は、「行きたくない」と言っていた。この問題は、まだまだ尾を引きそうだ。

(I.H)

## 2017 あいち・平和のための戦争展

平和展資料を展示し、平和展スタッフが参加します。

【日 時】8月10日(木)～13日(日) 午前10時～午後6時(※最終日～午後5時)

【会 場】市民ギャラリー矢田(名古屋市東区大幸南1-10)

【入場料】500円(高校生以下、障がい者(介助者含)無料)

【問合せ】2017 あいち・平和のための戦争展実行委員会 電話:052-931-0070/FAX:052-933-3249

## 平和展スタッフ募集

教化センターでは、大谷派と戦争の関わりについて調査研究し、その成果を平和展にて報告・展示しています。平和展スタッフを募集しますので、ご関心のある方はお問い合わせください。

## 【要 項】

・条 件 真宗大谷派の僧侶・門徒

・内 容 月2回の学習会へ参加し、平和展を企画・運営していただきます。

【問合せ】名古屋教区教化センター(担当:新野、寺西)

電話:052-323-3686 / FAX:052-332-0900

## 新任職員 挨拶

2017年4月11日付で教区事務嘱託に任命されました。

事務職員 服部 岩光

教化センターで図書管理を担当させていただくことになりました。共に学んでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



## ■教化センター

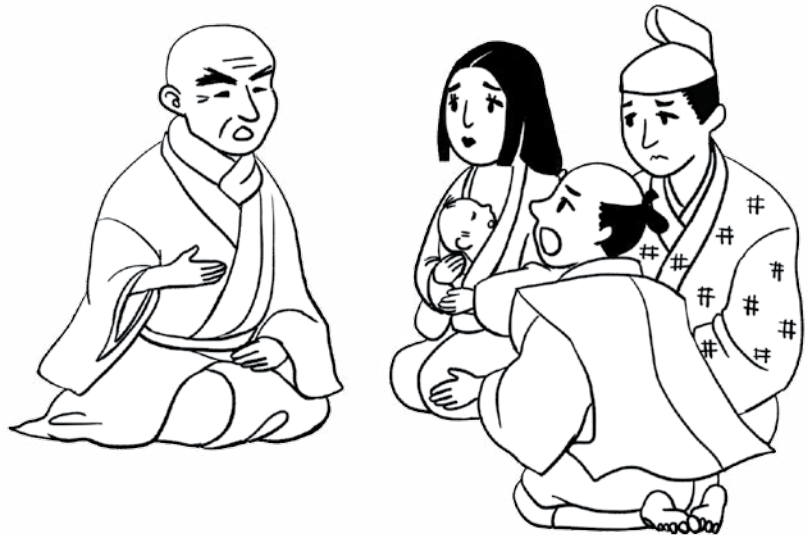
〈開 館〉月～金曜日 10:00～21:00  
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間  
～お気軽にご来館ください～



イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。  
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。